

新しき 年の初めは 弥年に

雪踏み平し 常かくにもが

大伴家持(巻十九・四三二九)

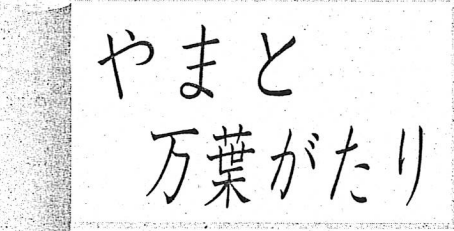
て、平穩・平和なる年が毎年続くようにとの願いが込められているといえます。

家持は、踏みしめなければならぬほどに降った新年の大雪を、部下たちと共に祝い、

にぎやかな正月を過ごしたことでしょう。家持が祈ったように、令和最初の新年を迎えた私たちにも、多くの祝福があることを願います。

(県立万葉文化館主任 研究員・大谷歩)

【訳】新年の初めは、ますます、年ごとに雪を踏み平らにして、いつもこうして宴をしたいものよ。



やまと
万葉がたり

代の759(天平宝字3)年元日の宴でも、歌を詠んでいます。どの歌も、新年を寿ぐめでたい歌ばかりです。今回の歌には、この時降った雪は特別に多く、4尺(約120cm)も積もったという注がつけられています。雪深い越中と、雪の少ない奈良との風土の違いに、家持も驚いたこと

令和最初のお正月、みなさんほどのように過ごされたでしょうか。初詣に出かけた方、家族でゆっくり過ごされた方、お友達とにぎやかに楽しまれた方、十人十色と思います。今回は、古代の盲人たちのお正月の様子を伝える新年の一首をご紹介します。「万葉集」の編纂に関わったとされる大伴家持は、746(天平18)年から751(天平勝宝3)年の間、越中国守として現在の富山県に赴任していました。今回の歌は、家持が越中国から奈良の都に帰京する751年の正月2日に、自らの館で催した宴で詠んだ一首です。正月に国守が部下を集めて宴を開くことは当時の慣例であったようで、家持は750(天平勝宝2)年正月2日と、因幡国守時

香具山と 耳梨山と あひし時

立ちて見に来し 印南国原

中大兄皇子(巻一・一四)

すが、史実とはいえませんが、額田王は天武天皇と結婚し子ももうけましたが、天智天皇と結ばれたとの記録はありません。

2020年は「日本書紀」編纂からちょうど1300年という記念の年です。当時の都があったことなどからゆかりの深い奈良県ではさまざまな記念行事が予定され、東京国立博物館では3月8日まで「出雲と大和」展も開催されています。

「万葉集」には「日本書紀」「日本紀」「紀」

この歌は、香具山は

やまと
万葉がたり

敵火ををしと 耳梨と相あらそひき 神代より かくにあるらし 古昔も然にあれこそ うつせみも 嬬をあらそふらしき(巻一・二三) という有名な長歌と一組の歌です。香具山と耳成山と敵傍山は現在でも県史で目印となる山々で、大和三山と呼ばれます。その三山を擬人化

【訳】香久山と耳成山とが争ったときに、阿菩の大神が立ち上がって見に来た印南の国原よ。

し、二男一女が恋の争いをしていっているという古代人に好まれた物語を歌に詠んだようです。その争いを見に来たという阿菩大神とは、出雲国(現在の島根県)の神様でした。三山の争いを仲裁しようとする雲から大和に到着するを詠んだともいわれま

香具山は「天の」と形容されるように、天から降ってきたという伝説もあり、特別に神聖視されていました。高い山を想像しますが、実際には標高150m程の山です。(県立万葉文化館指導 研究員・井上さやか)

次回回は2月19日